
振り出しへ戻る

鈴夜 音猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

振り出しへ戻る

【Nコード】

N3740C

【作者名】

鈴夜 音猫

【あらすじ】

付き合って3ヶ月。彼の気持ちが見えず、不安を募らせた少女・三笠雫が出した決断は…？思春期の少女が織り成す、恋愛模様。

何もかも、始めから間違っていたんだ

「はあ？別れた？あんた達、まだ3ヶ月目よね？」

「早苗、声大きい…」

慌て辺りを見回しながら、三笠^{みかさ・しずく}は小声で親友をたしなめた。
お昼時の食堂はとても賑やかだ。そのお陰か、親友の大声は掻き消^{なえ}されたらしい。ほっと胸を撫で下ろす雫をよそに、親友・椎原^{しいはら・さ}早苗は話を続ける。

「原因は？」

問われた雫は答えに詰まった。それは昨日、彼・桐丘^{きりおか・やすみ}泰文にも聞かれた言葉。

俯いて答えない雫に早苗は呆れ顔で尋ねた。

「雫さ、泰文の気持ち疑ってる？」

「それは…」

凶星だった。

勢いで告白したのは雫の方。だから、彼が付き合ってくれているのは、唯の優しさではないかと思っていた。俯いたままの雫に早苗はため息を吐く。

「あんた達、付き合ってたじゃない。それって両想いって事じゃないの？」

早苗の言葉に雫は答えない。そんな雫の様子に早苗は大きく息を吐くと、彼女の頭をポンポンと叩いた。

「あんたがそれで良いなら良いけどさ」

決して雫を責めない早苗。その優しさが逆に辛い。いつそ、怒って欲しかった。特に早苗には…

そもそも雫が泰文と出会ったのは早苗の紹介だった。泰文は違うクラスで、早苗の幼馴染み。

趣味も似ていた事から、雫は彼と直ぐに打ち解けた。おまけに一目惚れだった事もあってか、泰文の色んな面に触れる度、雫の中で好きという気持ちが大きくなっていった。

だからかもしれない。泰文の気持ちを疑う様になったのは。自分だけが、彼を好きでいる様な感覚に陥り、彼の気持ちが見えない事に不安を感じたのは。

「三笠！」

聞き覚えのある声。振り返るとそこには泰文がいた。

「三笠、待つて！」

考えるより先に身体が動いていた。くるりと踵を返し、駆け出し

た雫を泰文が追いかける。

「待てって！」

雫に追い付いた泰文が彼女の手を掴む。そうされる事で、雫はようやく足を止めた。

「何で逃げんだよ……」

すぐ傍で泰文の声がする。雫は俯いて、泣きそうになるのを堪えていた。

「昨日の話だけど……理由、聞かせてくれないか？」

優しい泰文の声が胸に突き刺さる様に痛い。雫は無意識の内に拳を握っていた。

「俺の事が嫌いになったなら、そう言ってくれ……」

「……がっ」

「え？」

雫は一つ息を吐くと、顔を上げて泰文を見た。その瞳に涙が浮かんでいる事に、泰文はすぐ気が付いた。

「違うの。嫌いになんか、なってない……」

「じゃあ何で……」

訳が分からないといった風の泰文に、雫は逆に尋ねた。

「桐丘くん、私の事好き？」

「え！？」

唐突な質問に、泰文は慌てた様子を見せた。その様子には雫は目を伏せる。

やはり、彼は…

「…この事か」

「…っ！？」

唐突に抱きすくめられる。雫は思わず泰文を見上げ、驚いた。彼は顔を真っ赤にして、それでも雫から視線を反らしはしなかった。

「俺は三笠が好きだよ」

それは初めて聞いた、彼からの告白。雫は自分の頬を伝う暖かな滴を感じた。

「実は、一目惚れだったんだ」

そう言って照れ臭そうに笑った泰文は、雫の頬をそつと撫でる。その手は雫の涙の跡をなぞっていた。

「入学したての頃、早苗と一緒にいる三笠をたまたま見掛けて…俺、早苗に三笠に会える様にしてもらったんだ」

「え…？それって…」

初めて知った真実に、雫は瞬く事も忘れ、泰文を見る。すると彼は何を思ったか、雫の頭を撫で始めた。

「だから、三笠が告ってくれた時すごく嬉しかったんだ。でも俺、緊張しいだから、いざとなると…」

そう言って笑う泰文が何だかとても可愛く見えて、雫は思わず彼に抱きついていた。

「三笠？」

「…ごめんなさい」

泰文の胸に顔を埋め、雫は掠れた声で呟いた。

こんな誠実な人を疑ってしまった自分が情けなかった。それと同時に申し訳なさが募る。

そんな彼女を泰文は優しく受け止めた。

「俺こそ、分かりにくくてごめん…早苗にも怒られた」

「…いいよ。そゆとこ、好き」

笑いながら顔を上げると、恥ずかしそうに笑う泰文の顔があった。雫はその顔を見ながら、一つの事を思っていた。

「あのね…また…」

「あ、待って！俺が言う」

雫の言葉を遮り、泰文は軽く咳払いをする。そして少し雫から離れると、深々と頭を下げた。

「三笠雫さん、俺と付き合って下さい！」

「…えっ！」

「始めからやり直し。告られてはつかじや示しつかないしな」

驚く雫をちらりと見て、頭を下げたまま、泰文が笑う。雫は一拍おいて微笑むと、泰文に向かって礼を返した。

「こちらこそ、よろしくお願いします」

二人で同時に顔を上げ、笑い合う。唯それだけで十分だった。その様子を影から見ていた早苗は、ようやくまとまった二人にため息を吐く。

「全く…世話のやける幼馴染みに親友だわ。…泰文に至っては、二年間の片想いだしね」

独り言で早苗はふつと微笑んだ。

「さあて、後で泰文シメなきやね。私の親友泣かしたんだから」

踵を返し、渡り廊下に行く早苗の不敵な笑い声が響く。と、時を同じくして、泰文の背に悪寒が走ったという…

（後書き）

どうも！毎度読んで下さっている方も初めての方も、ここまで読んで下さりありがとうございます。如何でしたでしょうか？今回の作品は、思春期頃の少女の悩みと言いましようか。なんとも言えない不安を表現してみたつもりです。おまけに恋愛というモノをした事もなく、文才がないに等しいので、良い表現が見つからずしつくり来ない点もあると思いますが、楽しんで戴ければ幸いです。またご意見、ご意見ありましたら、ビシバシ書いて下さると有り難く存じます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3740c/>

振り出しへ戻る

2010年11月8日08時41分発行